初瀬山

愛京城傍耳成山、畝傍山、則到琴引坂顧之曰、宇泥咩巴椰、彌彌巴椰、是未習風俗之言語、故訛畝傍山謂宇泥咩、訛耳成山謂瀰瀰耳、時倭飼部從新羅人、聞是辭而疑之、以爲新羅人通采女耳、乃返之、啓于大泊瀨皇子、皇子則悉禁固新羅使者而推問、

〔萬葉集雜歌〕過近江荒都時、柿本朝臣人麿作歌、

玉手次、畝火之山乃、橿原乃、日知之御世從、或云自宮阿禮座師、神之書、樛木乃、彌繼繼爾、天下、所知食之乎、

○下略

〔萬葉集雜歌〕藤原宮御井歌

八隅知之、和斯大王、高照、日之皇子、龍妙乃、藤井我原爾、大御門、始賜而、埴安乃堤上爾、在立之、見之賜者、○中略畝火乃、此美豆山者、日緯能、大御門爾、彌豆山跡、山佐備伊座、○下略

〔運步色葉集葉〕初瀨山　又泊瀨

〔書言字考節用集乾坤〕泊瀨山又作初瀨、和州城上郡、

〔和漢三才圖會大和七十三〕城上郡

泊瀨山或訓止末世　海士小船、隱口、籠口、皆泊瀨之枕詞也、

〔冠辭考阿一〕あまをぶね　はつせの山

万葉卷十に、海小船、泊瀨乃山爾、落雪乃、消長戀師、君之音曾爲流、こは船の湊などに擕著たるを、船はつるといへば、はつせのはつに冠らせたり、さて泊瀨と書たるを、後の人のとませと訓しは、甚しきものなり、大和國城上郡の長谷は、古事記に、允恭條波都世能夜麻能、雄略紀に、播都制能野麿、万葉に、波都世能夜麻など假字に書たれば、動かぬ訓也、

〔冠辭考三古〕こもりくのはつせ

古事記に、允恭條輕皇女許母理久能、波都世能夜麻能、また、許母理久能、波都勢能賀波能、日本紀に、雄略天皇